

# 子どもの本

## 研究会

私の作品から 『サンパギータのくびかざり』（今人舎）と

『手をつなごうよ』（彩流社）

松居 友

熱帯の島、フィリピンのミンダナオ島に住んで、現地でNGO『ミンダナオ子ども図書館』を立ち上げてから15年という歳月が、あつという間に過ぎていった。その間、一冊の本も絵本も書かずに来た。理由は、山の先住民の貧困の現状や、百万を越す戦争避難民が出るイスラム地域での救済活動に、体を張って集中してきたからだろう。（註）そして、何よりも困難に出会っても死なない現地の子供たちが持つ「生きる力」に強く魅せられたからだろう。

しかし15年が経過して、日本から若者たちが訪れるようになり、彼らの多くが現地の子供たちから生きる力を受けとって涙ながらに帰って行く姿を見て、話を聞くほどに日本の若者たちの心の現状が大変で、引きこもりや自殺率も世界で最高のレベルになっている事がわかってきた。そんな現状を見るにつけて、日本の子供や若者たちへ、ミンダナオから生きる力を、絵本や本という風に乗せて送ろうと決心して、15年ぶりに絵本『サンパギータのくびかざり』（今人舎）と青少年向けに『手をつなごうよ』（彩流社）を仕上げた。『手をつなごうよ』（彩流社）は、戦争がしばしば起こるこのような所で、なぜ読み聞かせ活動をはじめたのか。そして、貧困孤児を中心にしたスカラシップ、医療、保育所建設、植林活動をしながら、問題家庭の子どもたち80人あまりと衣食住を共にしつつ、彼らが何故生きる力を持っているのか、お話しの中に生きている社会とは何かを描いた。

そして、絵本『サンパギータのくびかざり』（今人舎）では、貧困家庭の娘が母を亡くし、孤独と死に直面しつつも、神秘的な体験の中で亡くなった母と出会い、それを通して、愛は死を越えて永遠に存在していること、そして貧困地域のコミュニティーの友情と隣人愛の力を描いた。日本の子供や若者たちが、死に直面しても、簡単に死なないために。

註：サイト検索「ミンダナオ子ども図書館だより」で、活動を見ることができます。

（作家）